

中区栄一丁目

第6次豎三蔵通遺跡発掘調査
概要報告書

1987

名古屋市教育委員会

例 言

1. 本書は、愛知県名古屋市中区栄一丁目2526・2527番に所在する豎三蔵通遺跡（市遺跡台帳番号7-4）第6次発掘調査（約600㎡）の概要報告書である。
2. 調査は、(株)若宮開発共同ビルの委託を受けて、名古屋市教育委員会が実施した。
3. 調査期間は1986年9月29日～11月20日であった。
4. 調査に係わる調整事務は市教育委員会文化課文化財係が担当した。
5. 調査は名古屋市見晴台考古資料館学芸員木村有作、伊藤厚史、千田嘉博が担当した。
6. 調査では、排土工事を大島造園土木(株)が請負い、平面図、石垣立面図作成をアジア航測(株)に委託した。
7. 調査及びに概要報告書作成に際して、次の方々のご教示、ご協力を得た。記して謝意を表する（敬称略）。
郷 由佳、戸田未起、岡田雅人（奈良大学）、荒木みのり（中京大学）、
下村信博（名古屋市博物館）
8. 出土遺物、記録類は名古屋市見晴台考古資料館が保管している。
9. 本書は調査担当者の協力を得て、千田がまとめた。

目 次

● 遺跡の位置と歴史的環境	1
Ⅱ. 調査に至る経過	4
Ⅲ. 調査の概要	
1. 調査の経過	5
2. 遺構と遺物	11
Ⅳ. まとめ	26

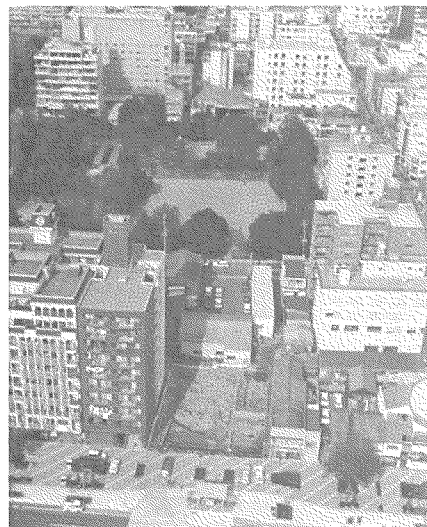
I. 遺跡の位置と歴史的環境

豎三蔵通遺跡は名古屋台地中位面南西縁部に位置し、中区栄一丁目に所在する。1983年の第1次調査以降、今調査までに5次に亙る調査が行われてきた。これまでの調査で旧石器・縄文・古墳～近世、幕末に及ぶ遺構、遺物が検出されている（名古屋市教育委員会 豎三蔵通遺跡発掘調査概要報告書1～5、1984～87年）。

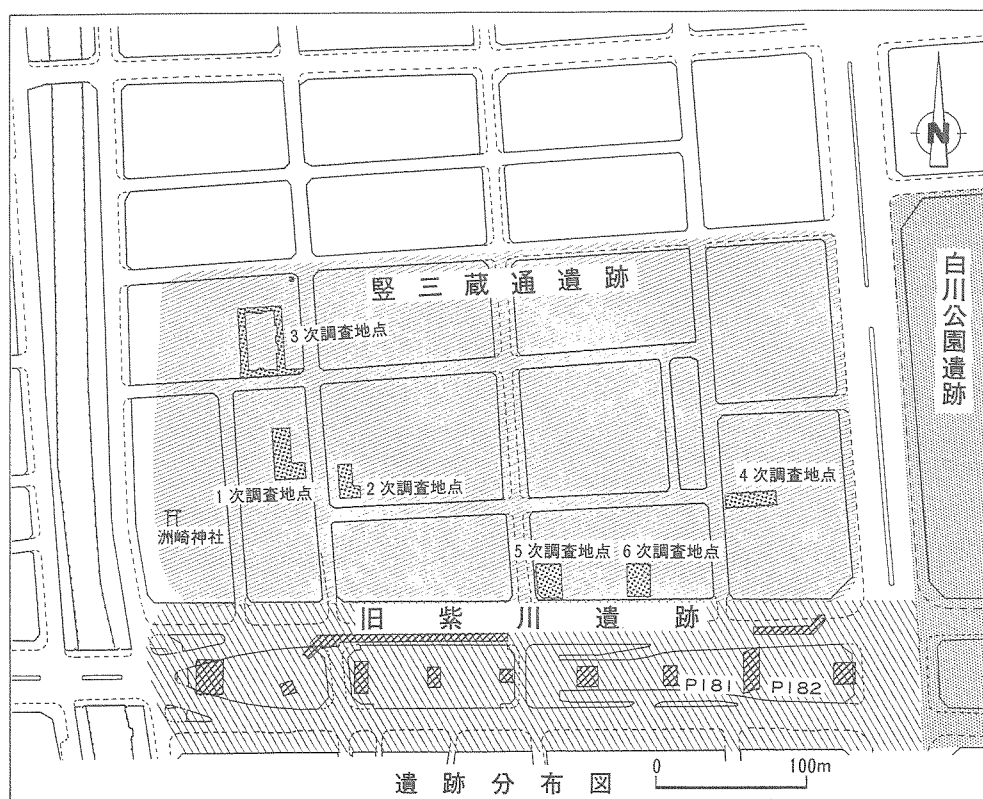
今調査地点は近世名古屋城下町を東西に区切った谷に望み、旧地形は南に傾斜していく所である。下りきった谷部分には紫川が流れていた（旧紫川遺跡）。名古屋市街地の中心部



分は慶長15年（1610）以降、名古屋城の築城工事と平行して行われた「清洲越し」によって計画的に形成された。今調査地点を含む一帯は大林寺、大須観音等を中心とした南寺町と、名古屋城三の丸から堀切筋に至る碁盤割された町人居住地に挟まれた、武家屋敷地域に当たる。ここには主に中・下級藩士が居住していた。屋敷は3間幅の南北通りに面して東西に正面を開き、背中合わせに短冊型に地割りされている。江戸期を通じて居住者には異動があり、一定していない。そして、今調査地周辺は比較的早い時期に武家屋敷地域から外され、町人居住地に変更されている地域である。各絵図で近世～近代の変遷を検討する。



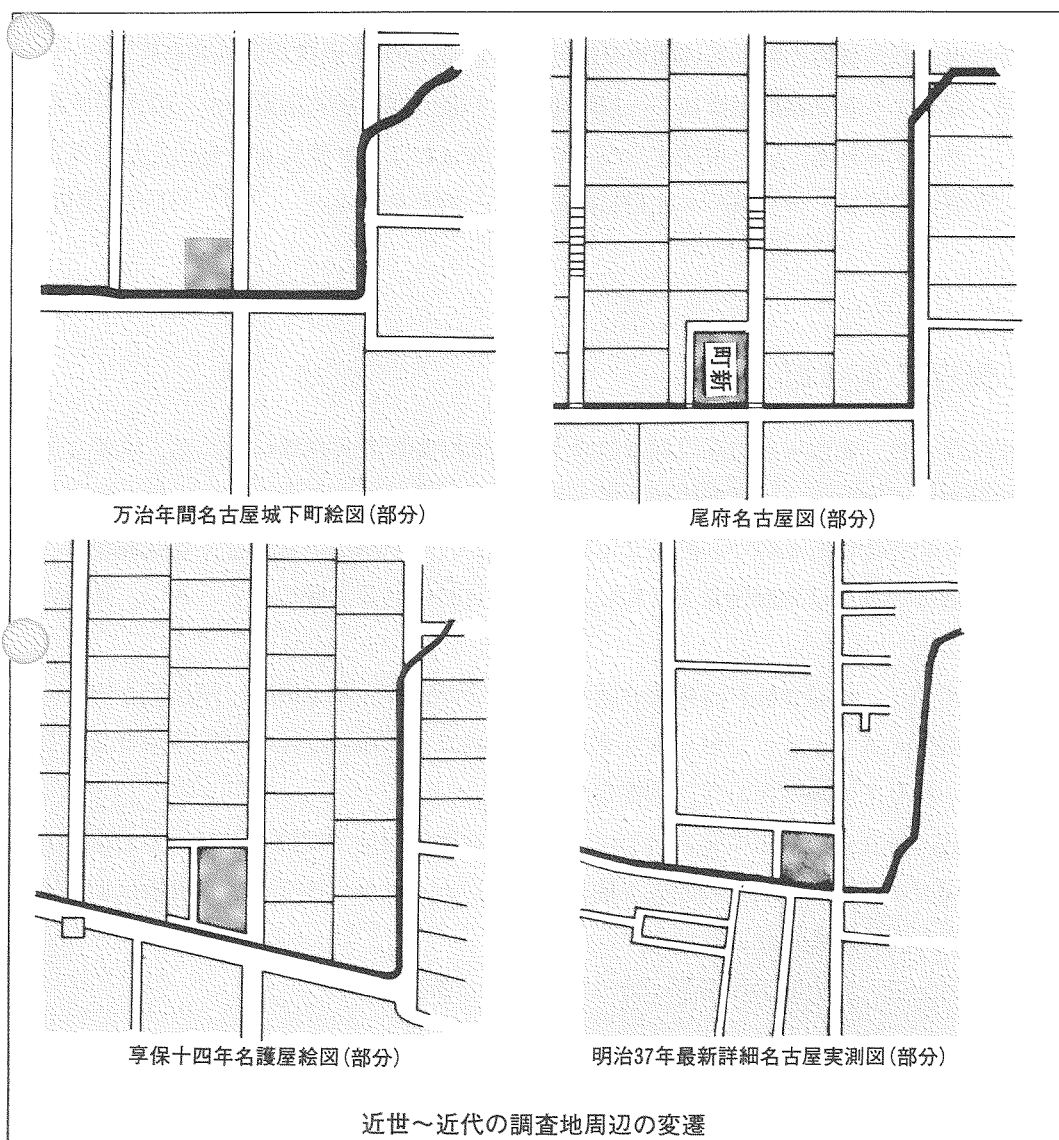
調査地周辺の景観



①現存最古の名古屋城下絵図で、寛文8年～延宝3年頃（1668～75頃）を描いたと推定される「万治年間名古屋絵図」（名古屋城管理事務所蔵）では紫川沿いまで武家屋敷が並んでいる。

②宝永7年～享保15年頃（1710～30頃）を描いたと推定される「尾府名古屋図」（蓬左文庫蔵）では、調査地周辺に当たる所に武家屋敷はない。「新町」として町屋が形成され、既存の南北道と東西道をつなぐ「」形の街路が造られている。新町という名称からも同図が作成された時期をそれほど遡らない頃に町屋として成立したことが伺われる。

③享保14年（1729）を描いた「享保十四年名護屋絵図」（愛知県立図書館蔵）でも、や



はり町人地とされる。街路はT形に描かれ西隣の武家屋敷境まで突き抜けている。この南側紫川の北岸にも狭い東西道が描かれ、同様に抜ける。

④明治10年（1877）の「愛知県名古屋明細図」（蓬左文庫蔵）でも「享保十四年名護屋絵図」と同じ街区が確認される。

⑤明治37年の市街地図では、③図で西隣の武家屋敷境まで突き抜けていた東西道が、さらに伸び西側の南北道に達してつなぐ。また別の明治年間市街地図では街区の中に東に正面を開く「旅館紺三屋」（？）が描かれている。

⑥1946年の米軍航空写真では城下町絵図に描かれた街路は明瞭に観察されない。空襲により家屋は焼失している。（P 24上段写真参照）

⑦この後、戦災復興と共に谷は埋め立てられ、東西に100m道路が造られた。

以上の検討より調査地周辺は1675～1729年の54年間の間に武家屋敷地から町人居住地に変わり、それ以降幕末・近・現代まで商業地域であったことが確認された。そして調査地点は「尾府名古屋図」の「新町」北辺に該当すると考えられる。

Ⅱ．調査に至る経過

昭和60年4月、名古屋市計画局保留地課より市教育委員会文化課に対して、埋蔵文化財包蔵地内の保留地について試掘依頼があった。同年10月にはこのうち栄一丁目2527について近々処分の予定があるので、再度文化課に試掘と、発掘調査の見積もりの依頼があった。同課学芸員は12月中に試掘調査を実施し、埋蔵文化財の包蔵を確認すると共に、見積書を提出した。

昭和62年6月、株式会社若宮開発共同ビルの代表が市文化課を来訪、保留地を取得したので発掘調査を依頼するとの申し入れがあった。同課では他の土地の取得計画があるならば、全部一括して実施したい旨、回答した。

同年8月、株式会社若宮開発共同ビルより当初取得の用地で発掘を依頼する連絡があり、合わせて調査予定地の現況建物の取り壊し予定が伝えられた。市文化課学芸員は取り壊しに際し、立ち会い調査を行った。

同年9月29日、表土除去の終了を待つて本調査に着手した。

Ⅱ. 調査の概要

1. 調査の経過

調査対象となる地域は前述のように、もともと谷地形だった所を戦後の大規模な都市計画事業により埋め立てた所であるため、表土層は厚い瓦礫土であることが予想された。さらに、南側を若宮大通りに面する他は、マンション、ビル等の家屋に囲まれている現状から表土除去に平行して発掘区東・南側にH鋼横板打ち込みを行い、安全対策を講じた。

表土除去後の状況は、予想どおり地表面から約 1.5m 下で包含層を検出し、東北側で石垣をL字状に検出した。調査は敷地いっぱいまで行う関係上、排土置場が取れないので調査区内南側に土を仮置き、北側から調査を進めた。まずは重機の取り残した攪乱土坑を掘削すると共に、調査区西側に南北のサブトレンチを入れることにした。この結果、北側は20cm程下で砂層を検出し、すぐ地山面になることが明らかになった。北東隅では、焼土の赤褐色砂質土を掘り込み、倒立状態で列を成して埋められている徳利を検出した。徳利の形から20世紀代のものと考えられる。

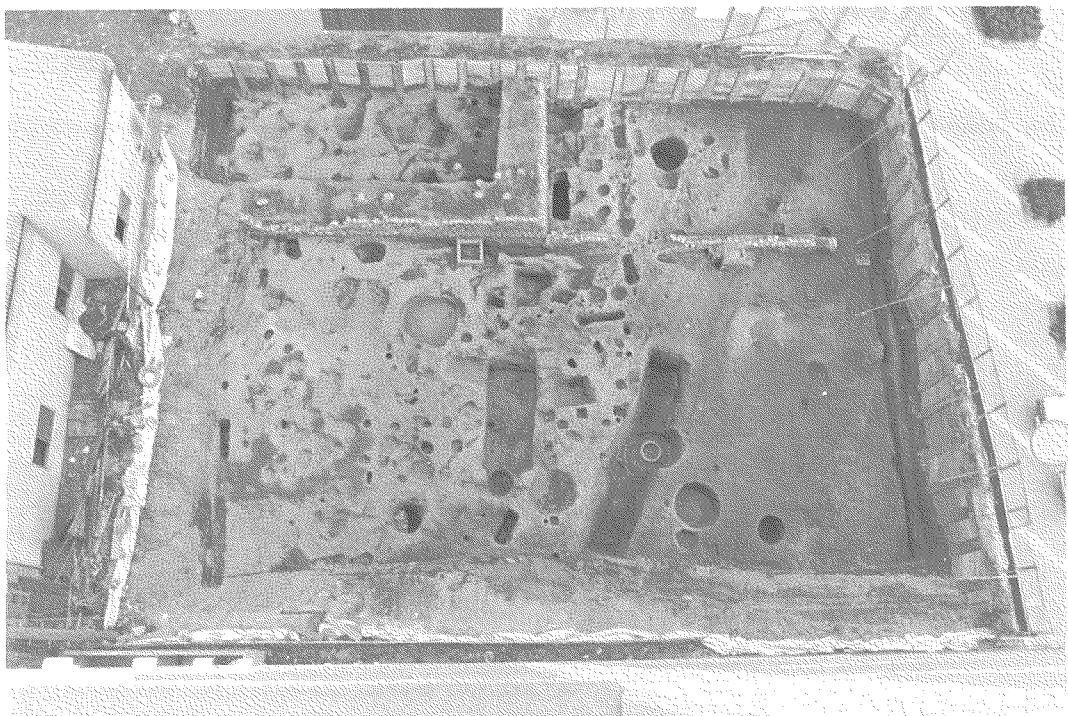
中央部では方形の大型土坑を検出したが、掘削の結果第二次世界大戦時の防空壕で2次的に火を受けた陶磁器、瓦等が出土した。

西側サブトレンチを南へ延長し土坑、溝等（4 DGr.）を検出した。土坑からは幕末～明治にわたる陶磁器多数が出土し、溝からは須恵器、山茶碗の細片が出土した。中世の遺物が出土したことから、遺構は希薄と考えられていた台地斜面にも遺構が存在している可能性が大きくなった。

10月6日に基準坑を設定し、調査区を5m四方のグリッド24に区分した。調査区北東端と南東端に基準坑を打ち、これを結んだ線を基準線にした。グリッド呼称は北東基準杭をAとし、西へB、C、D、南へ1、2、3……とし、この組み合わせによる北東角の杭番号で表すことにした。

10月6～17日は、1A～3AGr. で検出した遺構の掘削、L字状に残る石垣西側の遺構掘削、4A～6AGr. の包含層掘削、遺構検出・掘削、5BGr～6BGr. の包含層掘削を行った。

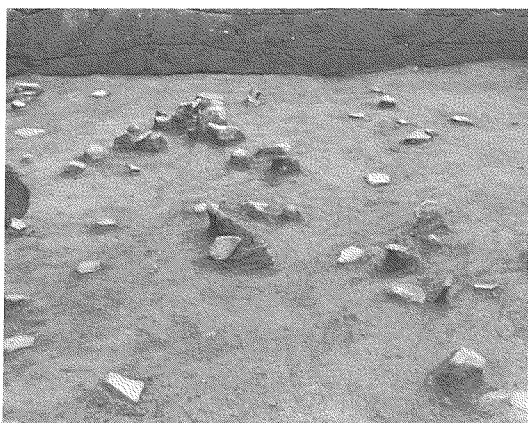
1A～3AGr. では約20cm程の暗茶褐色砂質土が堆積していた。遺物は大半が陶磁器類であったが、2AGr. では山茶碗の比較的大きな破片が混じっており注意して掘下げた。黄褐色砂の地山面において多くの土坑を検出したが、ほとんどは幕末～明治のものであった。しかし、2AGr. SK06 は中世の遺物を多く出土し、近世以降の遺物を全く含ん



調査区全景



SK23 (南から)



5CGr. 遺物出土状況



5DGr. 遺物出土状況



SD40 常滑甕片出土状況



SK44 馬目皿出土状況

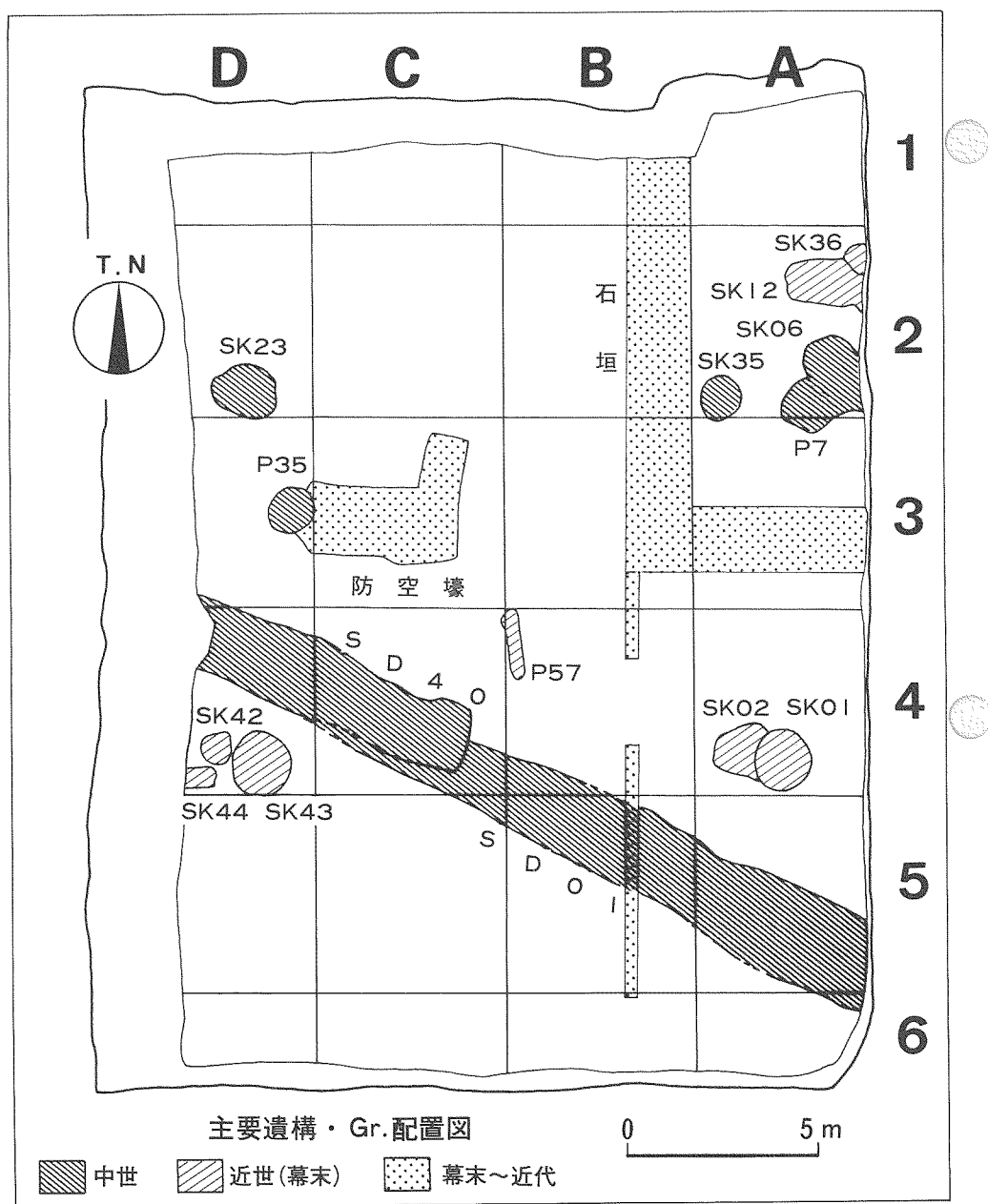


德利出土状況


でいなかったことから、中世の遺構と判断した。この遺構の埋土の堆積状況は自然に堆積した様子を示していた。


石垣の南側4 AGr. では、包含層は薄く地山面においてPit、井戸、土坑等を検出したが、いずれも幕末～明治時代にかけてのものであった。

5 AGr. は地山面が南へ傾斜する分、包含層は厚く堆積していた。調査区東壁は攪乱が多く土層観察に不適當だったため、1 m西にセクションベルトを設定した。アゼに沿って



サブトレンチを入れ断面観察を行ったところ、緩やかに傾斜する地山の傾斜転換線に沿って浅い溝遺構（SD01）を検出した。SD01は東西に流れ、埋土は1cm大の小石を多く含む砂層で、細片ではあるが大量の中世陶器、須恵器を含んでいた。包含層は基本的に上層から茶褐色砂シルト・褐色砂シルトが水平に堆積し、地山直上は、Gr. 北側では褐色砂～暗褐色砂、南側では黒褐色砂シルトであった。茶褐色砂シルトは遺物は少なかったものの、上面に一部礎石等が認められたこと、これ以下の土層からは中世までの遺物しか含まない状況であったことから近世の土層と判断された。

10月20日から月末にかけて南西側の調査を行った。南端に排土を置いている関係上、4C、D、5CGr. から掘削を始めた。4C、DGr. は包含層が薄い状況であった。4C  中央部で方形の溝状遺構（SD40）を検出した。埋土上位から多くの中世陶磁器が出土する状況でセクションベルトを設定して掘下げた。SD40中央部はしっくい枠を持つ昭和の井戸で一部破壊されており、先に井戸掘り方を検出し溝の遺物と混ざらない様留意した。4DGr. 東D軸南北セクションベルト沿いに深掘りを入れ、SD40が西側に続くことを確認した。しかしこのSD40は、先に検出したSD01とほぼ同じ位置、方向にあたるので両者の前後関係を明らかにするよう、土層の切合い等の確認に努めた。SD40の埋土は上層では地山ブロックを含む土であったが、下層は灰褐色シルトをバンド状に含む砂層であった。この砂層は途中何層かの鉄分沈着層を持ち、赤褐色を呈して固くなっていた。そのため地山面の判断は慎重を期した。

5C、DGr. 6C、DGr. では包含層の掘削を行った。基本的に5BGr. と同じ堆積であった。上層の茶褐色土層には遺物は殆ど含まれていなかった。その下には鉄分が多く沈着する褐色土層と黒灰色砂層が堆積していた。遺物は中世までのものを含んでいた。5C、 r. では地山直上で遺物が集中して分布するところがあった。後に精査して、地山面が若干窪んでいるので遺物が流れ込んでいたことが判った。

6C、DGr. では褐色土層の下に黒褐色土が堆積していたが、期待に反して遺物は少なかった。この下は白灰色砂シルトであった。これは地山に近いものと判断されたが、谷状の窪んだ地形に堆積しているので、掘削し谷地形を検出した。

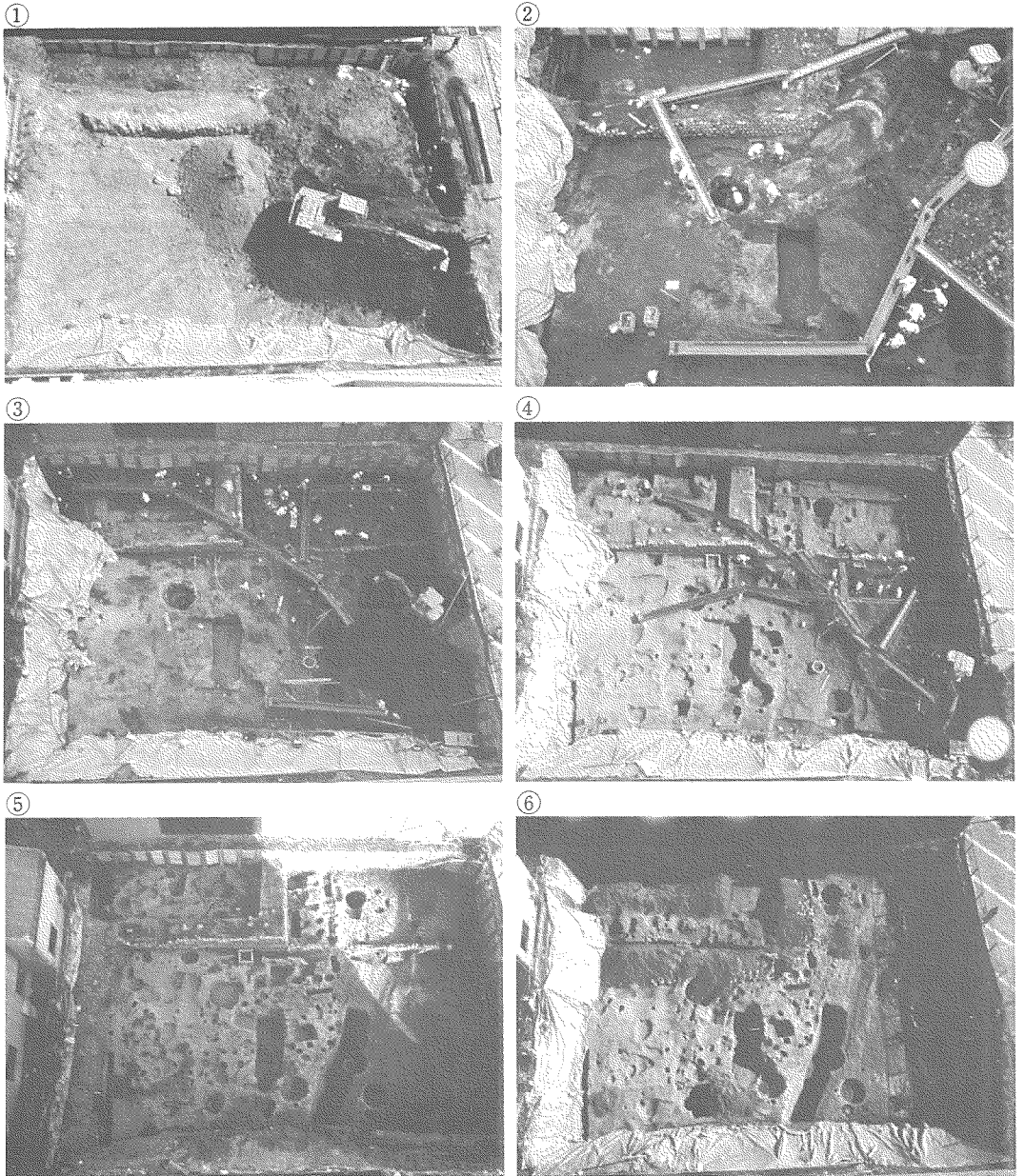
11月4日から11日にかけて掘り残しの遺構の検出、掘削を行い、翌12日ヘリコプターによる空中写真撮影と石垣立面の写真撮影を行った。

11月17日から20日にかけて石垣を取り壊し、下の遺構の検出、掘削、石垣立ち割り断面図の作成を行った。石垣は基段部の石積みは明治頃に遡る可能性もあるものの、3段目以上の石積みは積み直し（もしくは増築）していることが明白で、且つ焼土層を切り込んで積まれていることが判ったので、新しければ第二次世界大戦以降のものであると判断され

た。また石垣構築以前の地山直上の包含層は幕末頃のものであることが判った。

先に進められた5次調査では旧石器時代の石器を検出しているのに、この作業と平行して調査区南端に3ヵ所の深掘りを行い、旧石器の確認を行った。しかし、存在を確かめることは出来なかった。

11月20日に全ての現場作業を終了した。



調査風景

2. 遺構と遺物

調査地の基本的な土層は、北半区では上位より第二次世界大戦後の盛土、茶褐色砂シルトで橙黄色地山に至る。谷に向かって傾斜する南半区では上位より第二次世界大戦後の盛土、茶褐色砂シルト、灰褐色砂シルト、暗褐色砂シルトで地山に至る。遺構は中世と幕末に大別される。以下、主要な遺構と遺物について概要を述べる。

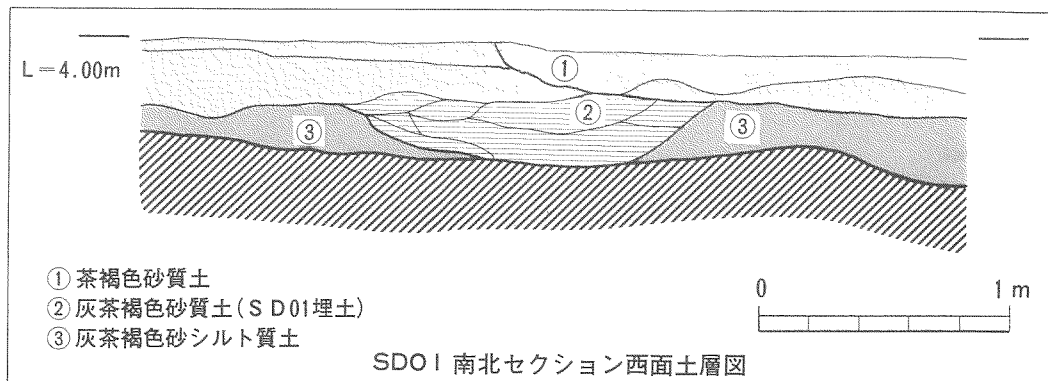
縄文時代～奈良時代

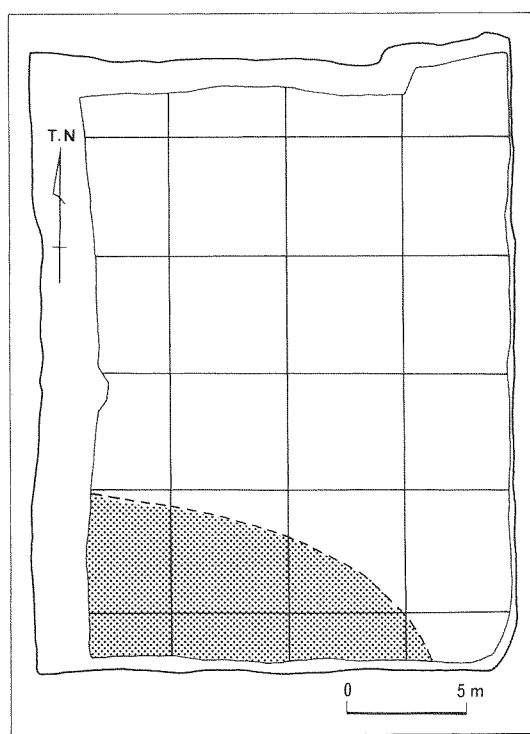
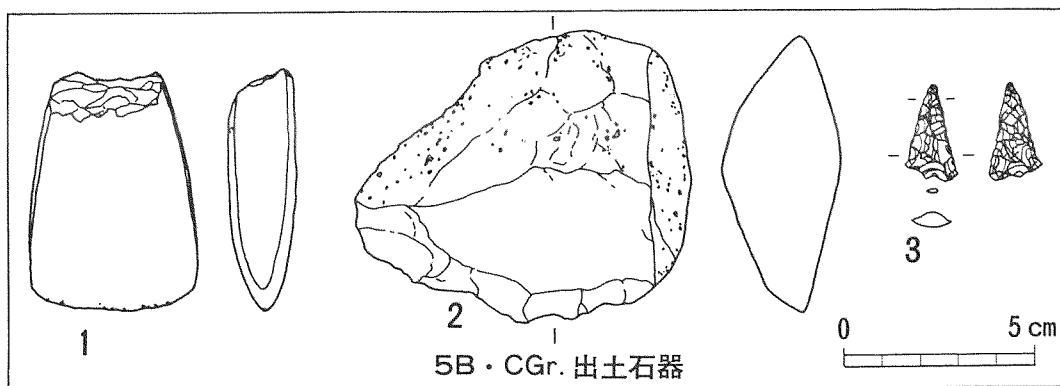
遺構は認められない。しかし、5 D・6 DGr. の谷地形に沿って傾斜する地山に堆積した暗褐色砂シルトから、縄文後期（称名寺式）の土器片、5 BGr. 地山直上から縄文時代の蛇紋岩製磨製石斧（次頁図の1）、5 CGr. 地山直上から礫器（右図の2）が出土した。また5 CGr. 暗茶褐色砂シルトから安山岩製石鏃（右図の3）が出土した。6 AGr. 地山直上からは、弥生後期の壺口縁片、5～6の各Gr. から奈良時代の須恵器が出土した。これらのごとより、この時期には調査地点は、南へ向う斜面になっていたことが確認された。

平安時代～中世

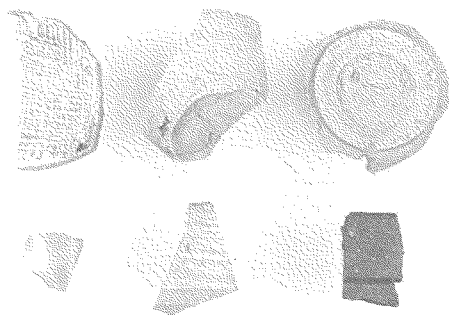
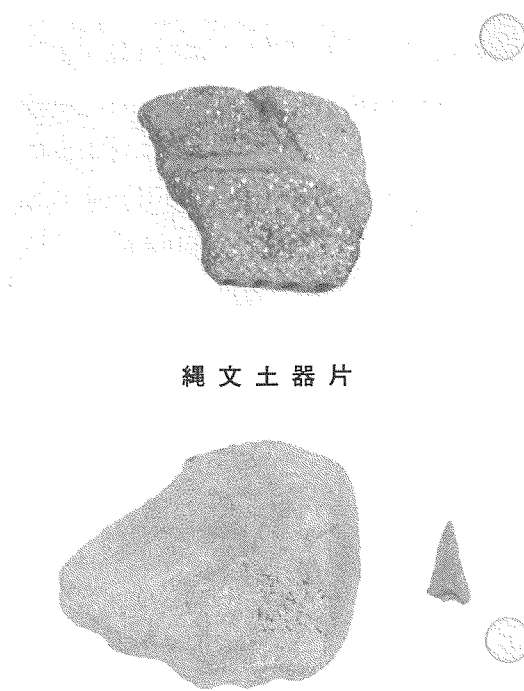
南半の傾斜していく部分には灰褐色砂シルトが堆積し、傾斜は弱くなっている。自然流路（SD01）、溝（SD40）、土坑（SK06、35）、井戸（SK23）、Pit（P7、35）がこの時期の主要な遺構である。

SD01（4 B、C・5 A、BGr.）は傾斜転換線上を東西に流れる自然流路である。ほぼ水平に堆積する灰褐色砂シルトを切り込んで流れており、茶褐色砂質土、灰褐色砂質埋土を持つ。検出した流路の深さは平均して30cmで、GN（座標北）から東へ117°の方向へ伸びている。西北方向へ流水したものと思われる。本流路からは須恵器片、山茶碗片、灰釉卸し皿片、灰釉盤片、常滑甕片、青磁蓮弁文碗片、陶丸等が出土した。いずれ

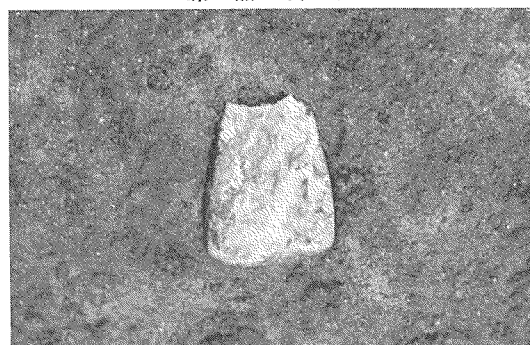




暗褐色砂シルト層の分布状況



SDO I 出土遺物



磨製石斧出土状況

も細片のため、図示し得ない。各遺物間に時代差があるが、その下限はおおむね15世紀代と考えられる。

SD 40 (4 C・DGr.) はSD01の流路を踏襲して掘られた溝である。近・現代の井戸によって一部分が破壊されていた。深さは約1.4m、幅約2mで検出長は7.7mである。GNから東へ111°40'の方向に伸びている。底面は北西に行くほど低くなり、この方向へ流水したものと考えられる。溝はさらに調査区外西へ続いていく。土層の観察から一旦掘られた溝が8割方埋まった後、深さ0.7m、幅1.5mに縮少し、北に寄せて再度溝が掘削されていることが判明した。両者の明瞭な時期差は遺物では見られなかった。

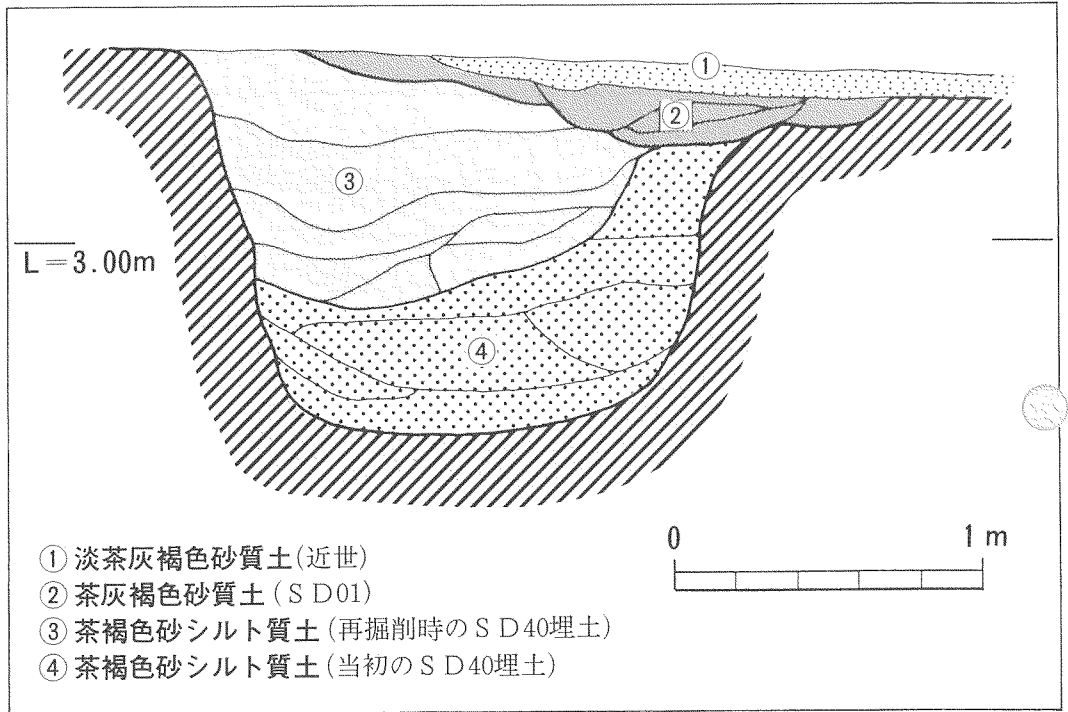
また、再度掘削された溝が埋没した後、上部をSD01が再び流れている。SD40からは須恵器・土師器片、山茶碗・鉢片、常滑甕片、青磁碗片、砥石片等が出土している。中世の遺物に限れば13世紀～14世紀代のものが主流を占めており、この時期に機能していたと考えられる。

SD40東端はほぼ垂直に立ち上がって途切れる。これに対応する溝等の遺構はなく、防御性は発揮し得ないプランである。これ故、城館の堀とは考えられない。豎三蔵通遺跡第5次調査、(1986年)で検出された谷方向(『第5次豎三蔵通遺跡発掘調査概要報告書』)に向かい掘削されたと推定される。

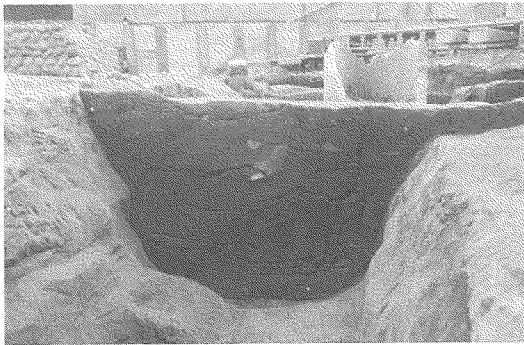
SK 06・P 7 (2 AGr.) は南北1.6m、東西1.6m(検出長)、深さ約1mの土坑である。東端は調査区外になり、不明である。上部は近世の土坑で削られていた。中央底面がやや高くなり、SK06とP7に区分できる。南北に設定したアゼ土層の観察結果では、両者とも埋土が連続することから、同時に存在していたものと考えられる。土坑最下層と、中位層の2面に鉄分が沈着する。須恵器片、山茶碗、常滑甕口縁片等が出土し遺物は中世までのもの



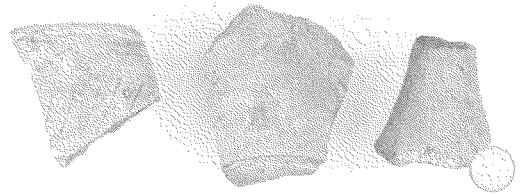
SD40 (東から)



SD40 東部南北セクション西面土層図



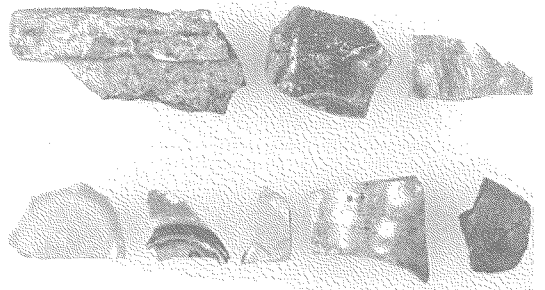
SD40中央南北セクション土層



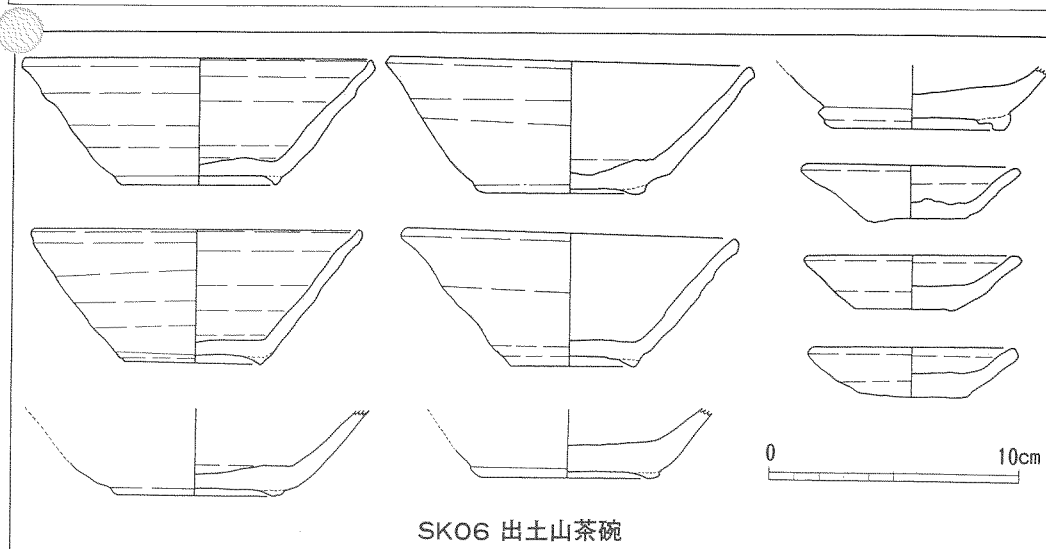
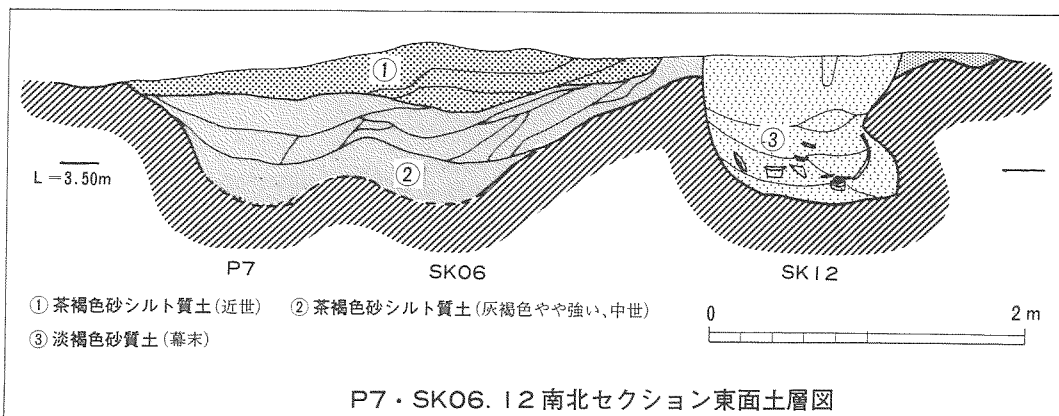
SD40出土須恵器



SD40出土山茶碗



SD40出土陶磁器・砥石



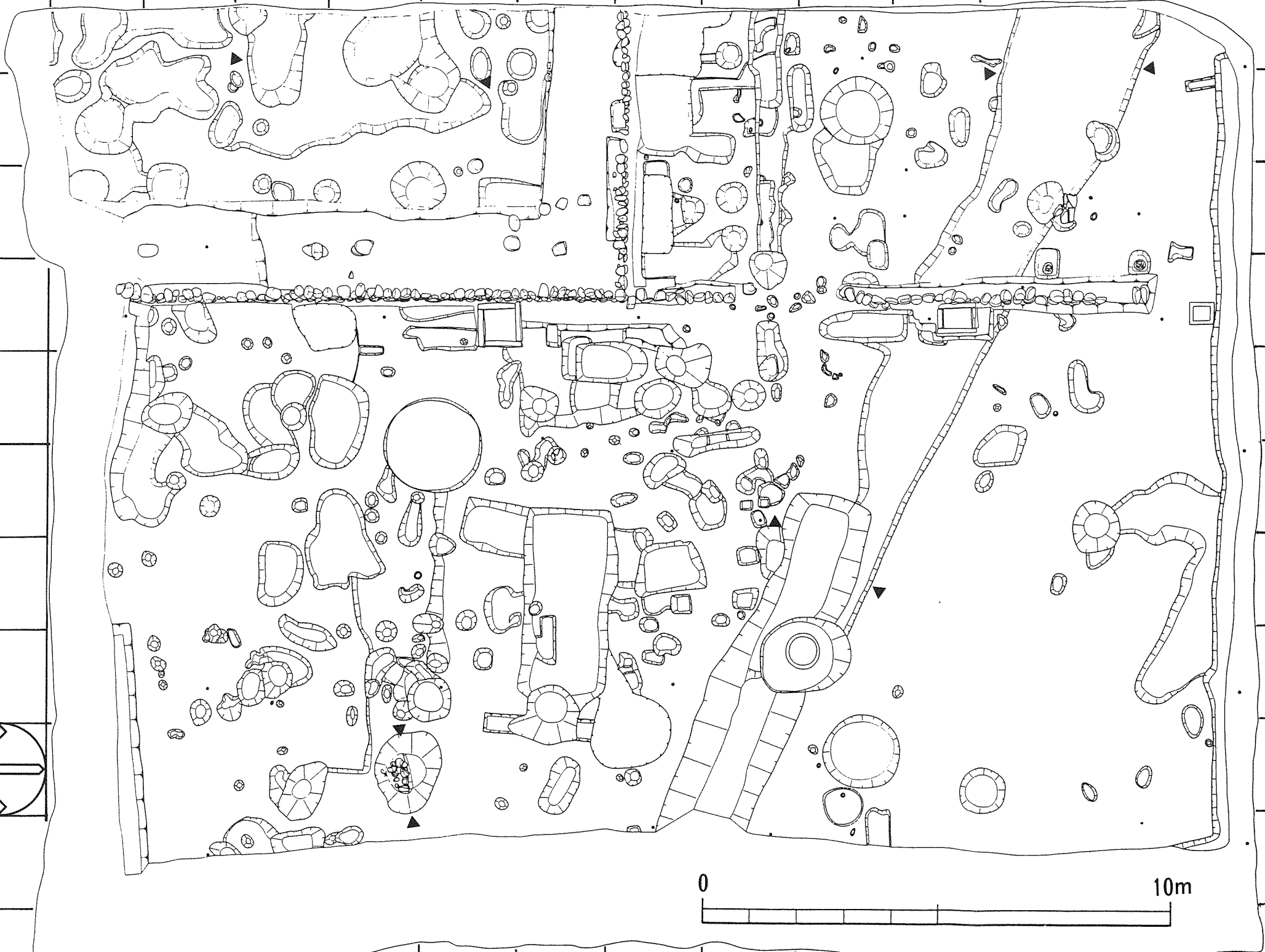
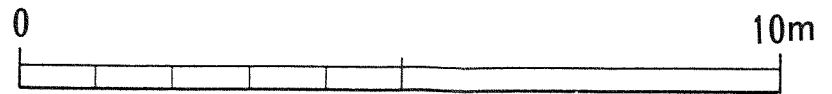
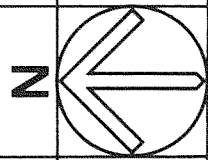
第6次調査地点遺構平面図

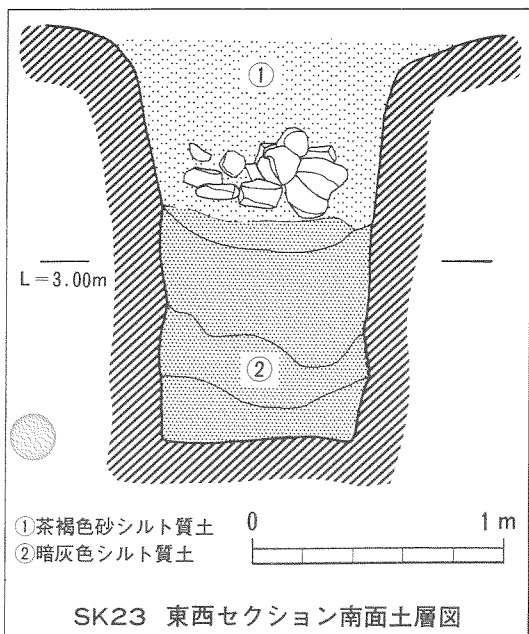
Y-24,350

Y-24,360

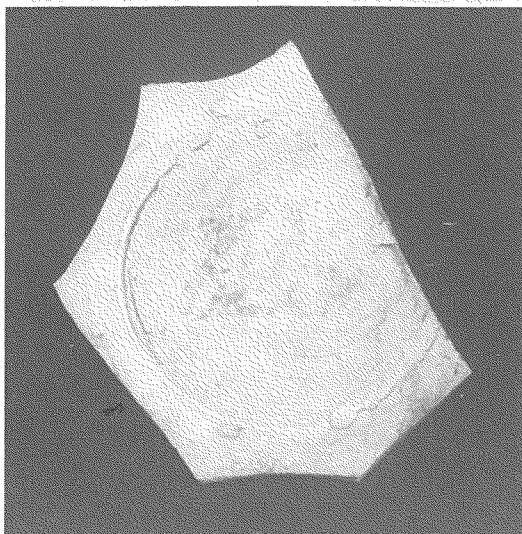
Y-24,370

X-93,180

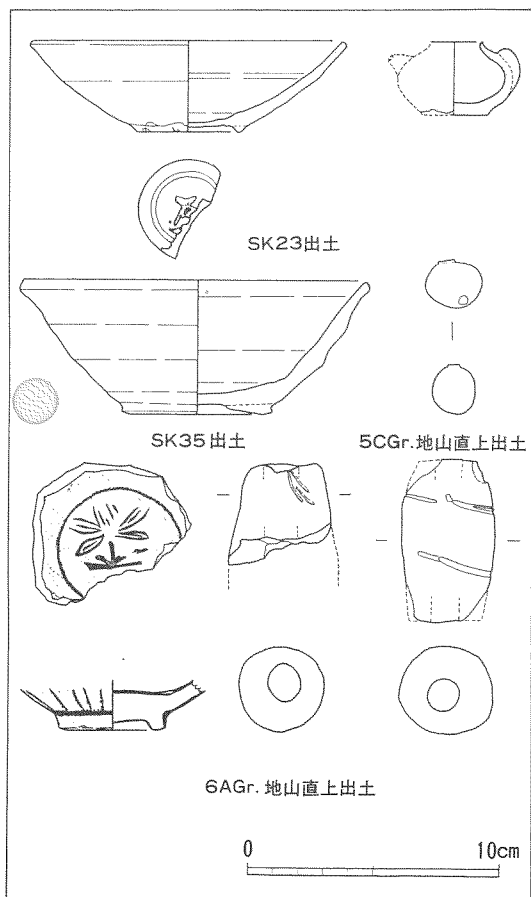




SK23 断ち割り状況



SK23 出土小皿墨書



SK23 出土遺物

のに限られた。山茶碗、常滑甕口縁より13世紀半ば頃のものと思われる。今調査範囲内ではまとまった遺構の一つである。

S K 35 (2 A Gr.) は幅 1.2m、深さ 0.4m の円形の中世土坑である。出土した山茶碗より13世紀前半頃のものと思われる。

S K 23 (2 D Gr.) は南北 1.4m、東西 1.7m、深さ 1.7m の土坑で、その形状から井戸と考えられる。地山面から深さ 0.7m までは人頭大の割り石を詰めた茶褐色砂シルトを埋土に持ち、これより下は割り石を全く含まない暗灰褐色砂シルトを埋土に持つ。(上層茶褐色砂シルト内の割り石は上半部を取り上げた状態で図示している) この土坑からは須恵器片、山茶碗、古瀬戸小壺片、青磁蓮弁文碗片等が出土した。このうち古瀬戸小壺の内面には墨痕が全面に付着する。墨壺としての使用が推定される。また割り石直下から出土している小皿片・山茶碗片には底部外面に墨書が認められた。小皿片のものはかすれているが、花押(かおう)と判明した。この花押は戦国期以前のもので、少なくとも、村落上層者の書いたものと推定される(名古屋市博物館学芸員 下村信博氏の御教示による)。山茶碗の墨書は大部分が欠損するため、正しく判読できないが、残存部から、小皿と同じ花押と推定できる。それぞれ銘銘器として使用されたと考えられる。

遺物から考えて、この井戸が機能したのは14世紀末～15世紀初め頃と思われる。

中世末～近世前半

16世紀～18世紀中頃の遺構・遺物は明瞭に検出できなかった。しかし2 A Gr. の土坑状に堆積した茶褐色砂シルトより、記年銘の硯が出土している。この硯は縦15cm、横 5.7cm で全面に墨が付着している。陸の部分は海の部分より深くえぐれ、縁は大部分損傷している。裏面左上から縦に細字で、

「 享
保 保
六
年 」

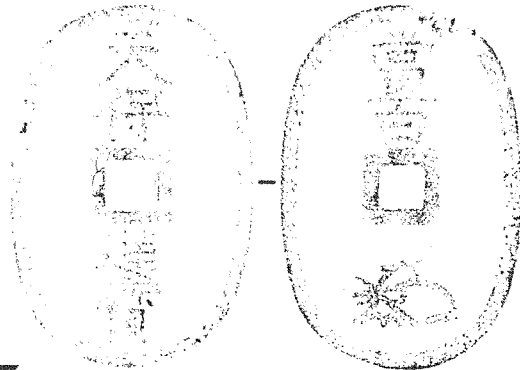
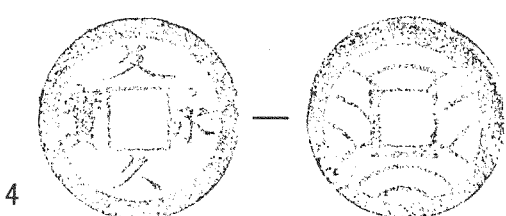
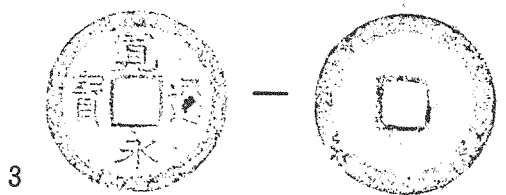
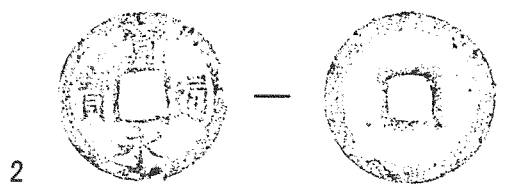
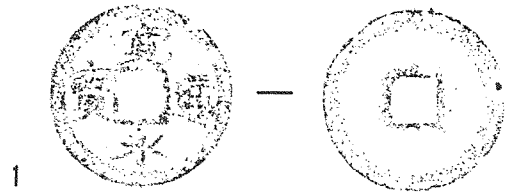
と線刻されている。他にも文字のような刻みが認められるが、判然としない。

また4・5 Gr. の茶褐色砂シルト包含層を中心に永楽通宝、寛永通宝が出土している。

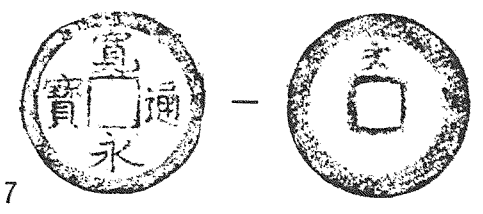
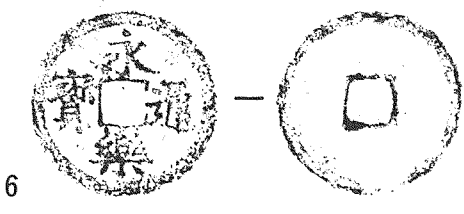
近世後半～近代

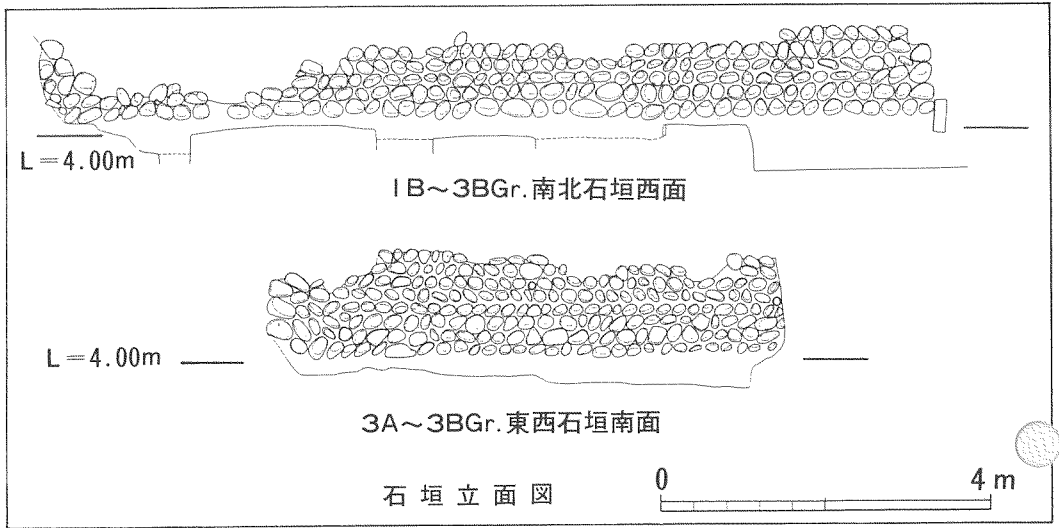
土坑 (S K 01、02、12、36、42、43、44)、石垣がこの時期の主要な遺構である。

4DGr. SK44 出土古銭(1~5) ▶
 2AGr. 茶褐色砂シルト出土硯 ▼



5AGr. 茶褐色砂シルト出土古銭(6~7) ▼





そして、この他多くのPitを検出した。1～4Gr.のPit・土坑群もほとんどこの時期に該当する。

S K 12 (2AGr.)は南北1.2m、東西2m(検出長)、深さ約0.9mで、東側は調査区外に溝となって続くと考えられる。砂質のきわめて強い、茶褐色砂質土を埋土に持ち、下半部から近世陶磁器片を多く出土した。これらより幕末頃のものとして推定される。

S K 42、43、44 (4DGr.)は近接して掘られた土坑群である。S K 42は東西0.8m、南北0.75mの円形を呈し、深さ約0.6mを測る。壁面はオーバーハングして底面が広がっている。S K 43は南北1.6m、東西1.7m、深さ約0.8mを測る。S K 44は東西0.8m(検出長)、南北0.5m、深さ約0.5mを測る。遺物はS K 42・43が概してまばらだったのに対し、S K 44からは馬目皿、蛸唐草文御神酒徳利、灰釉灯明皿、灰釉双耳壺、染付小壺等、大量の幕末～近代の陶磁器を得られた。

またこれと共に土製人形型を検出した。土製人形型には、だるま型、にわとり型、福祿寿型(?)があった。

だるま型は、正面型大2点(ただし内一点は未焼成の粘土のまま)、小1点と裏面型大1点(すぐ東の4CGr.昭和井戸攪乱土中より検出・二分の一残存)、小2点(内1点は二次的な火を受けている)の合計6点が出土した。未焼成の型は土器に挟まれて出来た、土坑内の空洞から検出したもので、奇跡的に原形を保って出土した。検出時は水分を含んでやわらかく、容易に変形し得る状況であった。焼成されて使用可能な型に加え、未焼成で制作途中の型も出土したことから、調査地近辺で土人形師が活躍したことは確実だと考えられる。

この型で造つただるまは、大は、高さ6.0cm、腹部の幅6.3cmを測る(乾燥時)。たくまの鼻を持ち、口をへ字に曲げる。肩から腹に向けて左右に3条のひだを付ける。小は、高さ5.2cm、腹部の幅5.4cmを測る(乾燥時)。肩から腹に向けて左右に3条のひだを付ける。現在一般に見られるだるま人形よりやや横長の顔で、鼻は低い。

にわとり型は片面のみ1点出土した。正面から見て左側の部分で、オスのにわとりである。脚部は表現されておらず、羽を揃え、尾を高く挙げ、座った状態である。この型で造つたにわとりは、横幅最大4.7cm、最小4.4cm、高さ最大5.7cm、最小4.8cmを測る(乾燥時)。比較的写実的な姿をしている。

福祿寿型は、正面頭部が1点出土した。きわめて縦長の頭部を持ち、帽子を被る。頭部だけの型で首部につながる様子は見られない。この型で造つた福祿寿は高さ4.3cm、横幅最大2.0cmを測る(乾燥時)。髭をたくわえ、満面に笑みを湛え前歯を見せている。


石垣(1～6BGr. 3AGr.)は、丸い河原石を積み、しっくい固めたものである。

同様の河原石による石垣は、旧紫川遺跡・白川公園遺跡・豎三蔵通遺跡で検出されている。地山面が傾斜し始める4 BGr. 以南では胴木を敷き、石垣の沈下を防いでいる。

1～3 BGr.、3 AGr. の石垣には下から2段目と3段目の間に石積みの乱れがあり、上部に使用されているしっくい新しく、またこの部分の裏込め土には第二次世界大戦時の焼土を含むことから、これら上部の石積みは戦後の改修によると判断された。下部の石積みは石垣下の遺構が明治頃のものであったことから、これ以降と判断された。

4 BGr.、5 BGr. の石垣は2～3段しか残存していなかったが、本来もさほど高かったとは考えられない。天場が残っておらず、使用時の高さは不明である。

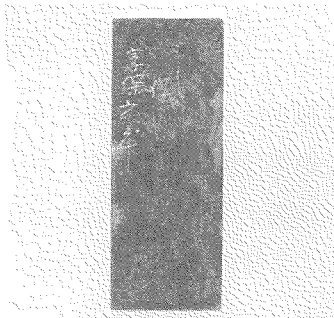
今回検出した石垣の南北方向は、ほぼ真北に正しく、東西方向はこれに直交するように築かれている。南北石垣西直下には排水溝（SH 01）が貫通する。3ヵ所に升が造られている。北の升は1 m×1 mの切り石造り。中央の升は90 cm×65 cmの切り石造り。南の升は50 cm×50 cmのしっくい造りで、北升の四分の一に縮小する。三者の升間距離は、北と中央が8.9 m、中央と南が4.4 mを測り、ほぼ二分の一に縮小している。

石垣内側の1 AGr. 北端の茶褐色砂シルト上層からは、東西石垣線と平行する方向で倒立した徳利21個を検出した。「おかよい徳利」と呼ばれる形のもので、胴部に書かれた地名より酒店は多くが調査地を中心に半径1.5 km内に所在することがわかった。その分布は、「南園町」等、旧城下町の中心商業地域と、「日置町」・「門前町」等、大須周辺の南寺町に分かれるようである。「大黒屋」（南園町）銘徳利は白川公園遺跡（2次）から、「富支店」（所在不明）銘徳利は旧紫川遺跡からも出土している。この分布範囲を大きく外れるものとして「犬山本町」・「キヨス外町」銘の徳利がある。

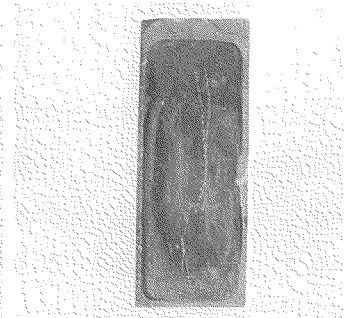
また、1 AGr. 茶褐色砂シルトの包含層からは、乗燭が出土した。底辺部周辺を除き、鉄釉が施されている。19世紀代のものと考えられる。この底部外面には、墨書が記されていた。判読の結果、

「
六
□ 月 亥
村 十
氏 五 年
日
」

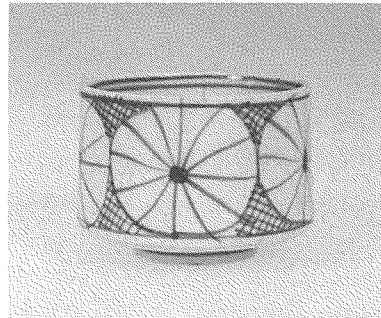
と書かれていることが判明した。



享保六年銘硯



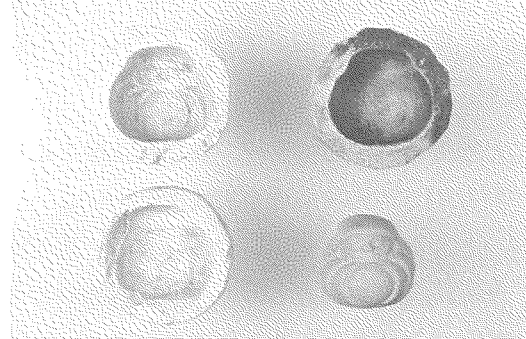
同硯裏面



SK 12出土呉須絵碗



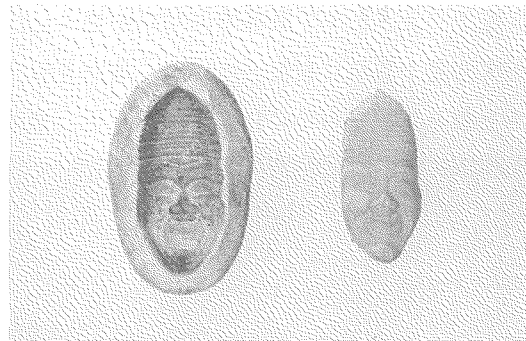
だるま型(大)と復元製品



だるま型(小)と復元製品



にわとり型と復元製品



福祿寿型と復元製品



1 A Gr. 出土徳利



1 A Gr. 出土徳利

IV. まとめ

前章まで今調査の概要を記してきたが、以前の調査の資料を加え簡単にまとめを行う。

- ①縄文～平安時代の遺物は南半部を中心に出土したが、明瞭な遺構は検出されなかった。
- ②中世では土坑、溝、井戸等を検出し、山茶碗を主にした遺物が出土した。この時期では1次調査地点で鎌倉時代の竪穴住居が、2次調査地点で戦国期の城館の堀(?)が検出される一方、3次、4次、5次調査ではまとまった遺構は検出されていない。現状では当時の景観や動向を復元するには到底至らないが、今調査で、村落上層者と推定される花押を持つ山茶碗、小皿が出土したことは、当該期の竪三蔵通遺跡を究明する上で、重要な手掛かりになると思われる。
- ③近世では幕末期の遺構、遺物が主流を占め、これ以前のは極めて微量であった。城下町絵図と対応する道路等は明確ではない。しかし、土人形型、徳利等の特色ある遺物が出土し、幕末～近代における様相の一端が明らかになったことは大切だと思われる。

また南北・東西の石垣ラインは時期的には新しいが、城下町時代の町割りを踏襲している可能性もあり、今後他の調査で発見された石垣や溝等と合わせて検討する必要がある。

前述のように竪三蔵通遺跡は旧石器～近代に至る複合遺跡であるが、調査地周辺は近年の再開発で急激に変貌している。遺跡を取り巻く状況は極めて厳しいが、今後も続くであろう個々の調査からの情報を組み立て、地域の歴史を再構成していくことが求められる。



S K 44 出土陶磁器



1946年 米軍撮影空中写真



調査地全景（南から）

昭和62年 3月31日発行

中区栄一丁目
第6次豎三蔵通遺跡発掘調査
概要報告書

編集 名古屋市見晴台考古資料館
発行 名古屋市教育委員会
印刷 澤多印刷有限会社